



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	学童期初期における骨および歯の成熟の評価と暦年齢, 骨年齢, 歯年齢間の関連性に関する研究 [全文の要約]
Author(s)	加藤, まゆこ
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(歯学)
Dissertation Number	甲第14528号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81196
Type	doctoral thesis
File Information	Mayuko_Kato_summary.pdf



学位論文内容の要約

学童期初期における骨および歯の成熟の評価と 暦年齢、骨年齢、歯年齢間の関連性に関する研究

Evaluation of bones and teeth maturation during the early stage of school age and the
relationship between chronological age, bone age, and dental age

博士の専攻分野名称 博士（歯学） 氏名 加藤 まゆこ

小児歯科臨床において、顎顔面、歯列の成長の評価を行い、個人の発育を把握することは治療方針の決定を正しく行う上で必要である。成長の評価法には身長、体重をはじめ、暦年齢、骨年齢、歯年齢などがある。暦年齢は出生時からの時間の経過を表しており、発育の度合いが異なる個人を一律に評価するものである。骨年齢や歯年齢は生理的年齢と呼ばれ、各臓器の発育度合いから個人の成長の段階を示すものである。骨年齢の算出には、Tanner-Whitehouse2法（TW2法）の1つであるradius-ulna-short bones法（RUS法）がある。また、歯年齢の算出には、歯の石灰化段階を判定して評価するDemirjian法がある。これらの算出方法を用いて、暦年齢、骨年齢、歯年齢の関係性を明らかにすることにより、個人の発育のより正確な予測が可能と考えられる。そこで本研究では学童期初期（6歳から8歳）の小児を対象に、骨種、歯種ごとの成熟度とその増加量を観察し、暦年齢、骨年齢、歯年齢間の関係性を検討した。

その結果、いずれの骨種も増加量が異なり、女子の方が男子より骨の成熟度が進んでいるか、男子と同程度であった。また、男女とも尺骨の増加量が最も大きい傾向がみられた。歯種別では、いずれの歯種も増加量が異なり、女子の方が男子より成熟度が進んでいた。また、男女とも7歳から8歳にかけて下顎第二大臼歯の成熟度が進んでいた。さらに、暦年齢と骨年齢間、骨年齢と歯年齢間、暦年齢と歯年齢間には相関関係がみられた。以上のことから歯の成熟度の観察をすることで、個人の成長度合いを予測することができる可能性が示唆された。